

# 源氏物語正編の骨格

—— 明石一族を視座として ——

山 田 利 博

光源氏没後の世界を描く、源氏物語匂宮巻には、次のような一節が存在する。

二条院とて造り磨き、六条院の春の殿とて世にののしりし玉の台も、ただ一人の末のためなりけりと見えて、明石の御方は、あまたの宮たちの御後見をしつつ、あつかひきこえたまへり。

(二三～四頁。以下本文引用は小学館完訳日本の古典による)

すなわち、光源氏亡き後、その財産の主要な部分を相続したのは、ほかでもないこの明石御方であったというわけだが、それでは何故そうなり、またそれがここで語られなければならないのだろうか。四つあった六条院の町の住人のうち、紫上は早く死に、花散里には実子がなく、秋好中宮は源氏と直接的な血縁関係がない上に冷泉院に入内しているので、残った明石がそれを継ぐのが一見当然のような気もするが、事はそう単純ではない。何故なら六条院はもともと秋好中宮の母である六条御息所の邸跡を取り込んで造営され、秋好中宮の実家としての役割も果たしていたので

あるから、彼女が相続するという可能性も全く考えられないわけではないし、花散里が養子とした夕霧は、表向き光源氏の長男（次郎は次男）であり、彼が全部受け継いでもおかしくはないからである。さらに出家したとは言え光源氏の正妻で、春の殿の住人でもあった女三の宮の息子である薫もいる。どうもそうすんなりいくものとも思えない。無論今を時めく今上の中宮である明石姫君の存在が最大の決め手になったのであるが、それとてこの物語が作り物語である以上、何故明石姫君が中宮にならねばならなかったのかが問われねばならないだろう。つまりこの一言は、一見何でもなさそうなことに見えながら、実は今まで普通に信じられてきた光源氏世界を、根本的に問い直すことを迫るものなのである。そこで本稿では、もう一度原点に戻って、六条院の真の主は誰かを考え直してみることになろう。

一

六条院の完成は少女巻であるが、その実質的な描写が開始され

るのは、その次の玉鬘巻とそれ以後の巻々、いわゆる玉鬘十帖であることは、今さら言うまでもなからう。その十帖では、源氏は玉鬘という存在のお蔭で、俗に言う六条院榮華の体現者となり得ていたことは、既に幾つかの拙稿で明らかにした。<sup>(1)</sup>そしてその玉鬘十帖が終わったところ（正確には玉鬘を鬘黒に奪われてしまった真木柱巻を含む）から源氏の凋落が始まることもまたそこに述べておいたが、それが明石姫君の入内を語る梅枝巻であることを、まず最初に押さえておかなければならない。もっとも、これは普通には、源氏の益々の繁栄を語ると捉えられているのだが、明石姫君の入内準備の一環として書かれている薫物合わせを読めば、そう単純には言えないことも、既にそこで指摘しておいた。ただこれは最初の確認事項となるので、煩を厭わずもう一度見ておこう。

梅枝巻で源氏が依頼したのは各人二種の薫物であつたが、実際は紫上は三種合わせ、花散里は一種しか合わせていない。しかし、判者の螢兵部卿官が選んだのは、各人一種ずつであるから、それがそれぞれの人物の特性を示すと理解すると、朝顔は黒方で冬、源氏は侍従で秋、紫上は梅花で春、花散里は荷葉で夏、明石御方は薫衣香で無季という季節の香を合わせたことになる。秋、冬という季節自体にも衰退の象徴性を読み取りたいところだが、そこまでせずとも、朝顔という六条院外の人物まで呼び込まなくては、この薫物合わせが成立しなくなっていること、及び紫上と花散里以外は自己の季に忠実ではなく、特に六条院の主宰者であるはずの源氏が、季の一つでしかない秋の香を合わせていることが問題

なのである。

そもそも六条院とは、各季節に彩られた女性を、源氏がその頂点に立って領導していく理想郷であつたはずである。ならばこの変化が如何に大きな意味を有するかは自ずと明らかであろう。源氏は既に一つの季を司る力しなく、代わって六条院すべての上に君臨する力を得たのは、一つの季に縛られない、無季の香を合わせた明石御方であることが示されるのが、この梅枝巻の薫物合わせの意味なのである。

この一つの季に縛られない浮遊性は、それまでの巻に登場し、やはり六条院榮華を領導していたと目される、玉鬘とも相通するのだが、そもそも明石御方は、冬の御方とは言いながら、最初から必ずしも冬に縛られてはいないのである。もっともこれ以前はそのことや、それが如何なる意味を有するかなどは必ずしも明らかにされてはいなかったのだが、玉鬘がいなくなり、源氏が六条院支配の切り札を失ってしまったこの時に、分かる者には分かる形で示されるのが、この薫物合わせだと思ふのである。そしてそれは二巻後の若菜巻に至って、より明らかとなる。続いてそれを見てみよう。

## 二

若菜上巻に至り、六条院が内部崩壊を始めること、及びその一環としてこれまでの光源氏の一生を相対化してしまう、明石入道の長い夢語りがあげられることは、もはや広く認められるところであろう。その夢語りは、明石女御の出産を契機として始められ

るのだが、それ自体が既に源氏の相対化に大きく寄与するものであることについても以前述べたことがある。<sup>(6)</sup>それは、多少の年立上の無理を犯してでも、源氏に孫を抱かせることによる、その老いの確認である。そしてそれに続く入道の夢語りを讀んだ後、源氏は次のような感慨を抱く。

「あやしく、ひがひがしく、すずろに高き心ざしありと人も咎め、また我ながらも、さるまじきふるまひを仮にてもするかと思ひしことは、この君の生まれたまひし時に、契り深く思ひ知りしにしかど、目の前に見えぬあなたのことは、おぼつかなくこそ思ひわたりつれ、さらば、かかる頼みありて、あながちには望みしなりけり。横さまにいまじき目を見、漂ひしも、この人ひとりのためにこそありけれ。いかなる願を心に起こしけむ」  
(若菜上・一〇一頁)

これによれば、源氏は自己の運命が明石一族によってねじ曲げられてゐるのを認めたはずであるが、やはり心のどこかではそれを認めたくない思いが働くのであらう、この言葉とは全く逆の行動をとる。それが下巻の住吉詣である。

「このたびは、この心をはあらはしたまはず、ただ、院の御物詣にて出で立ちたまふ」(一二三四頁)とあるように、この住吉詣はその真の意味を隠して、あたかも源氏自身の願ほどきのように装われたものであった。しかし、既に鈴木日出男氏が指摘されているように、この住吉詣の世界は、和歌によってそこに属せるものと属せないものとが画然と分けられている。もっともそれによれば明石女御まで属せない方に入ってしまうことにはなるのだ

が、幼い頃から紫上に育てられ、明石一族としての記憶を持たないこの姫君を例外とすれば、源氏以外の源氏世界の者は誰一人この世界に入れていないことになり、この参詣の中心がどこにあったかは自ずと明らかであらう。

にも拘らず、木村正中氏は同じく鈴木氏の御指摘を踏まえられながらも、この時明石御方の存在が希薄であったことを主因として、私見と全く逆の結論を出しておられる。<sup>(8)</sup>しかし、以下に挙げる理由から、それにはやはり従えないのである。第一に、この参詣の中心が源氏と明石尼君の贈答の側にあることは氏自身も認めておられるのだし、確かにここでは明石御方の影は薄いが、その代わり明石尼君の存在が奇妙に重い。これは彼女が明石御方の代役を果たしていることを雄弁に語るものだと思うれるし、見方によっては尼君の方が、入道まで含めた明石一族の意志を代表するにはよりふさわしいとも言えよう。

氏は他に、その見解を支えるものとして、これ以後明石一族関係の記述が減少することも挙げられている。しかしその理由は、実質はともかく、<sup>(9)</sup>ここで明石尼君が「幸ひ人」(一四〇頁)と規定されてしまったためと考えられる。宇治の中君もそうであったが、幸福な者はストーリーを開拓していくエネルギーを失うというのは、万古不変の文学の原理であらう。その証拠として挙げられるのが御法巻や幻巻に登場する明石御方の姿で、木村氏も述べておられるように、以前からそれはやや冷たい印象しか与えないと評されてきたが、それは彼女がすっかり自己の世界に充足してしまひ、他者に対してそれほどの配慮ができなくなっている、或いは

する必要が無くなっているからなのである。

以上、どのように検討してもこの住吉詣の場面はやはり明石一族が中心となっておりとしか考えられないのであり、ここに至っては既に源氏ですらもその中に取り込まれていると言うことも可能なのである。

さて、これほど強大な明石一族の権勢の出所は、初めに触れたように、言うまでもなく明石女御の存在にあるが、この明石女御というのは後世の読者がつけた便宜的な呼称であり、実際には本文には出てこない。「昔の御宿直所、淑景舎を改めしつらひて」(梅枝巻・一九二頁)とあるように、彼女は正確には桐壺女御であった。この呼称がこの物語の首巻桐壺を呼び起こすものであることは既に阿部好臣氏が説かれており、以下の記述はしばらくそれと相似線を描くことになるが、聊か見解を異にする部分もあるので、このまま叙述を進めることにする。

### 三

周知の如く源氏物語は、桐壺更衣と帝の悲恋物語から話が始まる。そしてその結果、この物語の主人公、光源氏が誕生するのであった。

前の世にも御契りや深かりけん、世になくきよなる玉の男御子さへ生まれたまひぬ。(桐壺・一四頁)

しかし、その後も更衣に対する迫害は強く、遂に彼女は光源氏が三歳の時亡くなってしまふ。彼女の父は大納言で亡くなってしまったので、この世の最高権力を有する帝の力を以てしても、遂

に女御と呼ばせられないままであった。その代わり帝は死後彼女に従三位を与える。人間としての彼が為し得る精一杯の形であった。

内裏より御使あり。三位の位贈りたまふよし、勅使来て、その宣命読むなん、悲しきことなりける。女御とだに言はせずなりぬるがあかず口惜しう思さるれば、いま一階の位をだにと贈らせたまふなりけり。(一九頁)

亡くなった大納言の「宮仕の本意」(二四頁)が、具体的にはどんなものであったかは、遂に物語に語られていないので、はっきりとは断定できない。しかしこの時代、娘を入内させた貴族で、皇統に連なることを夢見ないものは誰もいないだろう。しかもこの巻ではまだそうならないが、彼が後に「按察使大納言」という呼称を与えられることから、それは類推し得るのだが、それについては後に触れる。だがその期待を担った光源氏は、臣籍降下という形で皇統から閉め出されてしまった。

それ故源氏物語は王権回復の物語として読めるわけだが、その最初の階梯が藤壺との「もののまぎれ」であったことも、やはり言うまでもないことであろう。その結果として二人の間には、後に帝となる冷泉が生まれる。しかもこの冷泉について、面白い比喻表現が見られることは、既に藤井貞和氏によって指摘されている。「玉」の比喻である。

これもやはり力の限界から、桐壺帝は最愛の息子である源氏を皇位につけることはできなかった。そのことを内心長く不満に思っていた桐壺帝は、誰にも指弾されない藤壺を母とした、源氏と

瓜二つの子、冷泉が生まれた時、これで思いが果たせると喜んで。その時の記述が紅葉賀巻にある。

源氏の君を限りなきものに思しめしながら、世の人のゆるしきこゆまじかりしによりて、坊にもえ据ゑたてまつらずなりにしを、あかず口惜しう、ただ人にてかたじけなき御ありさま容貌にねびもておはするを御覧するまに、心苦しく思しめすを、かうやむごとなき御腹に、同じ光にてさし出でたまへれば、瑕なき玉と思はしかしづくに、宮はいかなるにつけても、胸の隙なくやすからずものを思はず。(六一頁)

しかし、この引用文末尾にもあるとおり、冷泉の出生の秘密を知る藤壺にとっては、その「源氏と似ている」ということが、逆に心配の種なのであった。

いとかうしもおぼえたまへるこそ心憂けれど、玉の瑕に思さるるも、世のわづらはしさのそら恐ろしうおぼえたまふなりけり。(賢木・一七三頁)

つまり冷泉は表面的には「瑕なき玉」だが、その実体は「瑕」ある玉だという、両義的な「玉」だったわけである。ところでこれ以前に「玉」で譬えられていた人物が一人いたことを思い出していただきたい。この節冒頭の引用文にあるように、その人物こそ誰であろう、冷泉の父光源氏なのである。これは決して偶然ではない。何故ならこの物語の中には「玉」という用例は、「薬玉」、「夜光りけむ玉」まで含めて、全部で二十一例ほどあるが、そのうちこのように人の比喩として用いられるのは七例<sup>(12)</sup>で、その内訳は、冷泉、明石女御が二例ずつ、後は源氏、玉鬘、浮舟が各一例

となり、限られた人物しか用いられてないからである。このうち玉鬘はその呼称及び幼名かとも言われる「藤原の瑠璃君」(玉鬘・一六九頁)から、「玉」に縁が深いことは明らかであるし、その繁栄の象徴としての力源はここに由来すると思うのだが、今ここでそれを繰り返している余裕はない。同様に、浮舟の場合は玉鬘との繁がりから説明できると思うのだが、それについてはまた別の問題へと発展してしまうのでこれも除外すると、残りの人物はすべて血縁関係にあることは容易に見えてとれよう。すなわち「玉」の比喩が用いられる人物は、ほぼこの一族に限られるのであり、ここに「玉の系譜」とも言うべきものを見ることができるといふことなのである。そして周知の如く「玉」とは王権と深い関わりを有するものであり、ここに皇統を目指すこの一族の強い意志が、明瞭に見てとれるわけである。したがって、桐壺更衣の無念を晴らすべく、源氏の次に期待されたのは、阿部氏が言われるように紫上ではなく、冷泉と考えるべきであろう。<sup>(14)</sup>

光源氏という「玉」に「瑕」があったかかなかったか。それは言葉で物語中に書かれることは遂になかったが、母方の身分の低さから、東宮になることは世人が許さないとという物語状況から考えれば、答えは自ずと明らかであったから、敢えて書かれなかったのであろう。それ故源氏は、前述の如く、皇統からはじき出されてしまった。次いでその期待を担った冷泉は、一応皇統譜に着くことができたのだが、見てきたように不完全な玉でしかない彼は、所詮長くそこに連なることは不可能だったのである。故に、この一族の血を楔のように長く皇統の中にうち込むためには、より完

壁な「玉」が要請されるわけだが、言うまでもなくそれが次の「玉」、明石女御なのであった。そこで次はその様相について見てみることにしよう。

#### 四

明石女御が最初に「玉」に譬えられたのは、彼女がまだ姫君の時代、別れに臨んで入道の心情が叙せられる時であった。

若君は、いともいともうつくしげに、夜光りけむ玉の心地して、袖より外には放ちきこえざりつるを……

(松風・一六頁)

この「夜光りけむ玉」とは、『岷江入楚』によれば、「海竜王」の玉だと言う。だとすれば、これはまさしく完璧であると言えよう。しかしもし明石女御に「瑕」があるとすれば、それはやはり母方の身分の低さにあろう。そしてこれは単なる推測ではなく、女御入内の時の母御方の思いとして、本文中にもはっきり示されている。

その夜は、上添ひて参りたまふに、御輦車にも、立ちくんだりうち歩みなど人わるかるべきを、わがためは思ひ憚らず、ただかく磨きたてまつりたまふ玉の瑕にて、わがかくながらふるを、かつはいみじう心苦しう思ふ。

(藤裏葉・二一九～二〇頁)

しかし、御方が自分を犠牲にしてまで育んできた女御の気品は、もはやそれを「瑕」とはしなかった。

いどみたまへる御方々の人などは、この母君のかくてさぶら

ひたまふを、瑕に言ひなすれど、それに消たるべくもあらず。

(藤裏葉・二二一頁)

かくて完全無欠な「玉」となった明石女御は、やがて子沢山の中宮となり、皇統譜に深々と根を下ろして、続編では押しも押されもしない存在として物語の世界に君臨する。だが同時にこれは光源氏の母、桐壺更衣の無念を晴らすことでもあった。と言うのは、前にも述べたように、彼女は更衣が望んでもなれなかった桐壺女御として出発し、彼女が辿った軌跡は、更衣及びその一族が願ってやまなかったものだと考えられるからである。

このように源氏物語正編の世界は、地上の最高権力を以てしても為し得なかった桐壺更衣を女御に上げるということを果たし、その怨念を晴らしていく一族の物語と捉えられるわけだが、それではその役割を果たすのが何故明石女御でなければならなかったかと言えば、彼女は単に源氏の娘だというだけではなかったからである。

「……いかにものしたまふ君ぞ。故母御息所は、おのがをぢにもものしたまひし按察使大納言の御むすめなり……」

(須磨・五〇頁)

源氏が須磨に来たことを知った明石入道がもらした有名な台詞の一節であるが、これからわかるように、桐壺更衣の一族と明石一族はもとは同族なのであった。つまり明石女御は父方から言っても母方から言ってもこの一族の血を引いていることになるが、彼女の力は単に血が濃いということに由来するだけではない。明石入道はこうも言っている。

「桐壺更衣の御腹の源氏の光る君こそ、朝廷の御かしこまりにて、須磨の浦にものしたまふなれ。吾子の御宿世にて、おぼえぬことのあるなり。……」  
(須磨・四九頁)

すなわち源氏が須磨まで流れてきたのは、すべて自分の娘の明石御方の宿世によるものというわけである。もちろんこれだけでは老法師の勝手な言いぐさということにもなりかねないが、この場合はそうではない。何故なら次の明石巻に、次のような入道と源氏の会話があるからである。

「いととり申しがたきことなれど、わが君、かうおぼえなき世界に、仮にても移ろひおはしましたるは、もし、年ごろ老法師の祈り申しはべる神仏の憐びおはしまして、しばしのほど御心をも悩ましたてまつるにやとなん思うたまふる。……」(中略)「横さまの罪に当たりて、思ひかけぬ世界に漂ふも、何の罪にかとおぼつかなく思ひつるを、今宵の御物語に聞きあはすれば、げに浅からぬ前の世の契りにこそはとあはれになむ。なかは、かくさだかに思ひ知りたまひけることを、今までは告げたまはざりつらむ。……」

(七六―八頁)

入道の言葉は前の引用文と概ね同じで、これだけでは自分の側からの一方的な見解を繰り返して述べているにすぎないととれるかもしれない。しかし、単に相づちをうつばかりではなく、「かくさだかに思ひ知りたまひけること」と、相手の言い分をほぼ全面的に認めてしまっている源氏の言葉は注目すべきで、これではここにこの件に関して両者の見解が一致したことを語っていると

理解する他はないではないか。すなわちこの時既に源氏の運命は、明石一族によってねじ曲げられていたのである。いや、そう見るのは少し正しくない。見てきたように、入道の言葉はこれまでの物語の流れをほぼ正確に跡付けている。ならば、ここで新たに「按察使大納言」と呼び直される桐壺更衣の父も、「宮仕の本意」などという抽象的な思考の持ち主ではなく、はっきりした家の意志を持つ者として捉え直されたと見るべきであろう。何故なら、この物語における「按察使大納言」とは、娘の入内によって家門の繁栄を図るイメージを帯びたものであることは、夙に上坂信男氏によって明かされているからである。そしてその瞬間この一族は同じく皇統に強い執着を持つ明石一族に包摂されていく。これがこの場面の論理だと思ふのだが、それ故源氏の運命が曲げられているとしたら、それは単に明石一族によってではなく、桐壺・明石一族とも呼ぶべき、この巨大な一族の意志によってと捉えた方が、より正しいと言えるであろう。すなわち、より完全な玉である明石女御を生み出そうという、この一族の冥々の力は、光源氏をも組み敷いて続いているということになる。もっとも若菜下巻に至ってもないのであるから、源氏自身は本当にはそうした意識を抱いてないであろう。つまりここから先は、源氏の意識上のことは皆錯覚で、真実はその陰にあるというのが物語の構造となっていくと思うのだが、だとしたら、最初に提起した六条院の真の主は誰かという問いには一体どう答えれば良いのだろうか。次にはそれについて考えてみよう。

木村正中氏も指摘しておられるように、明石女御は遂には「六条の女御」(若葉下・一三二頁)と呼称されるに至る。これは六条院を代表する女御という意味であろうが、今まで見たことから考慮すれば、それは、木村氏のように彼女が六条院に取り込まれてしまったと見るべきではなく、むしろ逆に彼女の存在そのものが六条院となつてしまつたと見るべきであろう。と言うのは、この呼称は、彼女の子供が遂に東宮位についたことを我々に知らせる文脈上に位置しているからである。すなわち、冷泉帝が退位し、今上帝が即位して、明石女御が東宮の女御から帝の女御に上がったこの時、六条院は完全に明石一族のものとなつてしまつたことを示すのが、明石女御のこの呼称だと思ふのである。それではないからそれが始まつたかと言へば、実はその始発から六条院は明石のものだつたと考えられるのである。

第一節にも述べた通り、そもそも六条院は四方四季の町にその季を司る四人の女性を住ませ、それを源氏が統轄する体裁をとっていたが、一人だけそれに従わなかつた女性がいた。それが他でもない明石御方であつたわけである。しかし、その浮動性だけでは納得できない向きは、そもそも四方四季の御殿は誰のものであつたかを考えてみるが良い。言うまでもなくそれは海竜王の御殿であるわけだが、だとすれば、「海竜王の后になるべきいづきむすめなり」(若紫・一六七頁)と評される明石御方が、最も縁深い人物であることは、見易い道理であらう。因みにこの例も

含めて、源氏物語の中では「竜」または「竜王」の用例は全部で四例あるが、うち二例は手習巻で引かれる竜女成仏の話(二〇三頁)と明石巻で神々と同列に祭られる竜王(六二頁)であつて、光源氏を指した例はない。それに対して明石一族は、御方の娘の明石女御までが、前節で見たように、「夜光りけむ玉」海竜王の玉に譬えられる。そして何より残つた一例、須磨巻末の嵐の夜に、異形のものが迎えに来た夢を見て、源氏が「さは海の中の竜王の、いといたうものめでするものにて、見入れたるなりけり」(五六頁)と思う場面は、やがて明石から舟が来て、源氏はそれに迎えとられるという、この後の展開を考えれば、やはり明石一族を意味していると思われるのである。すなわち、明石一族が海竜王の一族であることは、物語の実に最初から、示唆されてゐるのであつた。

したがって、繰り返すことになるが、六条院の真の主は、最初から、海竜王の一族たる明石御方なのである。それが、多分、彼女が最初は二条東院の東の対の住人として予定されていながら、結局それは実現されないのに、六条院が完成するや否や、一番後とは言へ、早々に移り住んできたり、源氏の死後、その遺産のはとんどを受け継いでしまう理由なのである。

## 六

以上、六条院の真の主は、明石御方、もしくはその一族と思はれることについて縷々論述してきた。つまり、一般に信じられてゐる、六条院の主は光源氏であるというのは、源氏がまだ玉璽と



いう「玉」を有していて、自身が「海竜王」となり得ていたかもしれない期間はまだしも、それを失ってしまった後は、彼自身も含めた我々の錯覚にすぎないということなのである。そう思ってみれば、藤裏葉巻で源氏が准太上天皇位を受けるのも、所詮は引退した天皇扱いと取れなくもないし、潜在王権という立場から見れば、こうして皇権に取り込まれてしまったことが、果たして源氏にとって本当にプラスになっているのかどうか、大いに疑問があろう。しかも、その直後に、当時としては老人の仲間入りであった四十に源氏になると書かれていることも、やはり問題と思われることは、以前にも書いたことがある。すなわち、如何様に見ても、源氏の力の絶頂は、長くとも玉簪十帖で終わったと見られるのだが、それにも拘らず読者がそうでないような錯覚を抱くのは、ある意味では仕方がない。と言うのは、先程の准太上天皇位もそうであったが、この物語のあちこちには、読者にそれを感じさせないような仕掛けが施されているからである。これはこの物語が「源氏」物語である以上、極めて当然なこととも言えるが、このことを迎っていくと、「では何故この物語は『源氏』物語なのか」という究極の命題に行き着く。しかし、それに答えることは膨大な手順を要することではあるし、本稿で扱った問題と余りに懸け離れてしまうので、別の機会を持ちたいと思う。

注(1) 拙稿(A)「源氏物語における男路歌——その対照的方法について——」(『中古文学論攷』早稻田大学大学院中  
古文学研究会 昭61・10)、(B)「六条院における玉簪——

- 繁栄の象徴としての役割について——」(『同』昭62・12)、  
(C)「若菜巻の夕霧——光源氏「孫」対面の場をめぐって——」(『同』昭和63・12)、(D)「玉簪の流離と幸運——玉簪と以後の巻々——」(『源氏物語講座』第三巻 勉誠社 近刊予定)
- (2) 注(1)の(B)。
- (3) 秋山虔「玉簪をめぐって」(『源氏物語の世界』東京大学出版会 昭39)等。
- (4) 注(1)の(B)、(D)。
- (5) 熊谷義隆「明石君と季節——『冬の御方』考——」(『山形女子短期大学紀要』昭58・3)、「源氏物語の四季」(『源氏物語講座』第五巻 勉誠社 平3)。
- (6) 注(1)の(C)。
- (7) 鈴木日出男「源氏物語の和歌」(『源氏物語の探究』第五輯 風間書房 昭55)。
- (8) 木村正中「住吉詣——明石一族の宿運(2)」(『講座源氏物語の世界』第六集 有斐閣 昭和56)。
- (9) 原岡文子「幸い人中の君」(『源氏物語両義の糸』有精堂 平3)及び注(8)。
- (10) 阿部好臣「明石物語の位置——桐壺との関わりにおいて——」(『語文』昭51・7)。
- (11) 藤井貞和「神話の論理と物語の論理」(『源氏物語の始源と現在』定本 冬樹社 昭55)。
- (12) 葵上が亡くなった時にも、「袖の上の玉の砕けたりけむよりもあさましげなり」(葵・一二二頁)という表現が見られるが、これは葵上Ⅱ玉を意味しているわけではないと見て、採らなかつた。

- (13) このことについての一つの解答としては、拙稿『源氏物語』における初瀬と石山——玉鬘物語と浮舟物語をめぐって——(『国文学研究』 早稲田大学国文学会 昭和60・10)を参看されたい。

(14) 注(10)に同じ。

(15) 源氏物語古註釈叢刊第七卷二三七頁。

(16) 上坂信男「源氏物語の人物描写」(『源氏物語講座』 有精堂 昭46)。

(17) 日向一雅「光る源氏論への一視点——「家」の意志と王

権と——」(『源氏物語の主題「家」の意志と宿世の物語の構造』 桜楓社 昭58)も同様な発想をしておられるが、明石一族を光源氏の榮華に寄与する存在にとられているところが私見と決定的に異なる。

(18) 注(8)に同じ。

(19) 元吉進「六条院構想にみる紫式部の方位感覚」(『学苑』 昭62・1)も同様の指摘をされている。

(20) 注(1)の(B)。

## 新刊紹介

上野和昭編

『名目鈔 声点付語彙索引』

(アクセント史資料索引 第十号)

『名目鈔』は洞院実熙が十六世紀後半に著した有職故実書である。本索引は、『名目鈔』の写本のうち、日本語のアクセントを標示する声点注記がある諸本について、声点付語彙のすべてを示したものである。

本索引では、内閣文庫蔵尊海識語本をは

じめ、アクセント資料として重要度の高い五本が表出本として取り上げられているほか、参考本として七本が表出本を補う形で取り上げられている。編者はこれらの諸本の原本閲覧調査を経ており、その成果は朱墨の別・声点の位置や形態・訂正などの各資料本の個別的特徴に関する簡潔にして十分な記述となって表れている。

声点はアクセント史研究のための重要な資料であるが、この時代は声点注記を行うことが稀であり、これほど多量の声点があり、正確に注記されている資料は少ない。声点

注記例には低高…のアクセントをへ去上…とするアクセント標示方法の存在もあり、漢字に注記された声点や多数の濁声点などとともに、『名目鈔』の声点には興味深い例が多い。この索引が編まれたことにより、アクセント史の研究が深められると信ずる。なお、本索引を御入用の方はアクセント史資料研究会(早大文学部秋永研究室気付)まで御連絡いただきたい。

(平3・12 アクセント史資料研究会 A 5判 一四八頁 二〇〇〇円)

〔鈴木 豊〕